

十勝川の河口と襟裳岬の中間の海岸に位置する晩成部落ホロカヤントー沼は今でも大樹市街からは奥地であるが、その昔、依田勉三が同志を率いて上陸し、最初に開拓した「晩成社」跡があるから、晩成部落がひらけたのは、早かったことになる。「大樹町晩成」とは、依田勉三が、苦勞を覚悟しての「大器晩成」と意識してのことではなかったか、と私は思えるのである。又、ホロカヤントー沼の両岸には堅穴群があつて、大昔は「街」だったらしく、人の行き来した「道路跡」がはっきり残っている。

昭和四十年、当時私が最初にホロカヤントーの写真を見た時、海岸一面にハマナスの花が咲き、湖水があつて、魚も釣れ、名前もわからない色々な花も咲く、と聞き、これは観光地になるのではないかと父に勧め、町の協力を得て、入所させたのである。その昔、アイヌの原住民や、晩成社の人達も、花の咲く時期は、襟裳岬の見えるこの丘で、きつと花々を眺めて楽しんでいない。

しかし、鉄道が敷かれ大樹の街ができてから、部落の人達が徒歩や馬車で、二十四キロの悪路を往復して市街に出るのはこれまた大変な所だったろうと思われる。だからこそ、この海岸が、最近まで、原始のままであったのかも知れない。

先日、まだ、沼の水が張っている時、一頭の雄鹿が海岸に走って来た。そして、いきなり海に飛び込んだ。私は出かけようと着替をしていたところだったが、奇妙なことがあるものだ、「鹿の入水自殺」か、と窓から見ていると鹿のあとから犬が一匹追って来た。

夏の間は、よく鹿の群を見かけはするのだが、こんなことは初めてだ。海に飛び込んだのは犬に追われたからの「背水の陣」と判ったが、一体どこまで

泳いで行くつもりなのか、望遠鏡を出して見ていると、鹿は五、六百メートルの沖まで行つて、やつと引き返して来た。沼にはまだ水が張っているのだ、海水もつめたかろう、よく泳ぐものだと感心して見ている。やつと海岸に泳ぎ着いたが、波は高いし、鹿は疲労困ぱいらしく、波打ち際で立ち上がれない。波にもまれて材木の様にころがっている。可愛相になったので、そばに寄つて、角を持って引張つてやつたが重くて動かない。それで急いで取つて帰つてロープを鹿の角に巻いて三輪バギーでやつと波の来ない所まで引き上げた。

この事を後日、人に話したら、それは、多分夏の間ホロカヤントーを泳いで横断している鹿が、ホロカヤントーが結氷していたので海を沼と間違えたのだらう、とのこと。なるほどと思つた。そこで、私は、だとすると、昔、この辺に住んで居た原住民達は、鹿を沼に追い込んで生け獲りにしていたに違いないと気がついた。原住民の堅穴は沼の両岸にあるから、向こうの鹿は、こつちに、こちらの鹿は向こうに追い込めば、両岸で待つていて手掴みで鹿を獲ることができただらう。丸木舟なども使つただらうか。

騒音と排気ガスの都会から移り住んで一年、まるで別世界。幼稚な空想をして、童話の様だ、と自分ながらおかしくなる。

然し、丹頂鶴も、時々来ているから、別世界であることには違いないかも知れない。鶴の声は首が長いせいか一キロ先からも聞える。鶴が来ると外の鳥達が何故か騒ぐ。回りで鴉や鳶が騒ぐのを気にする風もなく悠然としているたはずまいと、必ず二羽ずつ並ぶ様に飛ぶ姿は、まこと優雅と言うにあたいする。そして、まるで気取つた様な羽の動かし方を見

米山 一成

故・米山一成 (よねやま いつせい)
1932年生る。

1988年4月より横浜より移住。
6月9日ホロカヤントーで漁業の作業中不慮の事故で死亡。この橋が遺構となりました。

ホロカヤントーの魅力



鹿は疲れ込み飛び海に

ると、実力を感じさせる。

都会にも鳶や鴉は居るけれど、ホロカヤントーの鳶は、良く鳴いてくれる。先日も望遠鏡で見ていると、鳶は、口を大きく開けて、そのまま「ピーヒョロロ」と顔に似合わない可愛い声で鳴くのだ。その外によく見かけるのは、青鷺、鴨、白鳥、シギ達だ。子供の頃母から水鳥が飛ぶ時はサオになりカギになると聞かされたが、実に見事な編隊を組むものだ。何故、水鳥だけが編隊を組んで飛ぶのだろうか？今年はこの海岸線を白鳥達が何組も北に向って飛ぶのを見ることができた。

ホロカヤントーには、五月から七月にかけて濃霧がちこめることがある。まるで牛乳を噴霧したような真白な霧だ。目の前に白いカーテンを掛けられたようになる事がある。沼の奥に漁に出ているとき、たちまち霧につつまれ急いで岸に寄って岸づたいに帰って来たこともあった。西欧の童話の中で、霧の深い夜何かが起る話があった。こんな情景なのかな、と思出ししたりする。

霧が立つのは海流の関係だと思いが、ホロカヤントーは、わりと冬、暖かく、夏、涼しい。その為か、海岸なのに、多くの高山植物

が自生している。普通は標高千メートル以上の山にあるというガンコウランが浜に密生しているし、スイスのアルプスにあるアルニカと思われる花もある。浜ナスも多いが、海岸に道路を作ってしまった為か、又は浜の砂が盛り上がった為か、二十年前から見ると、ずっと少なくなってしまった。多少は、手を加えて保護しなければ、ますます減るのではないかと思われる。

浜ナス、と云えば、今年の国体を「はまなす国体」とか銘打っている様だが、都合のいいことだけ利用して、その保護には、手も金も出さないのでは「やらぶぶたくり」とかい言葉が思いだされる。

私達がここに人所して管理して来たので他人に荒されることは防いで来たが、功罪半ばと思う。これからは、どうすればいいか気掛りなことだ。

父が入所してからホロカヤントー沼に鯉とワカサギを放流している。鯉は七十センチ、ヘラ鮒三十センチ、冬のワカサギ釣は、上手な人は二キロも釣る。その外アメモス、ウグイも数知れない。

又、海では八月中旬から十二月まで秋鮭が釣れる。九月上旬の最盛期は海岸線を見渡す限り何キロにも渡って、釣竿の林立でみごとなものだ。此処、十勝海岸の秋鮭は、品質も上等とか、札幌から来たお客が話していた。

今年も、もうじき花が咲き始める。ハマナス、エゾカンゾウ、ハナショウブ、ムシヤリンドウ、ミヤマグサ、ハマベンケイ草、コハマギク、それに黒百合と、もつともつとあるが、私はあまり知識がない。自然が、自然としてあるとき、人はあまり高く評価しない。何んでも同じだが、失なつた時に、その貴重さに気が付く。然し、その時は、もう手遅れだ。